一部に誤記訂正があります。詳しくは、http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039907 をご覧ください。

日本語教育研究 第33輯(2015. 10. 31. pp.7~15)

日本漢字音の学習史と漢字音教育

佐々木勇*

1.「常用漢字表」

1.1「常用漢字表」とは

本稿が指す日本の「常用漢字表」とは、改定常用漢字表(2010年6月7日、文化審議会答申)である。

「常用漢字表」は、現代日本における常用漢字の形・音・義を、簡略な一覧表にしたものと見ることができる。漢字を音の順に配列しており、常用の音がない場合は、訓によって配する。

1.2「常用漢字表」の音

常用漢字表は、常用漢字2136字について、2352の音と2036の訓とを掲げる。音の方が多い。音の順に配列されているのは、そのためであろう。

音が掲載されていない常用漢字は、2136字中、77字である。これに対して、訓が掲載されない常用漢字は、819字有る。

これによって、現代日本語においても、漢字の音が重要な役割を果たしていることが知られる。

2. 日本漢字音の多様性―「常用漢字表」に見る―

本稿における「呉音」「漢音」「唐音」の用語は、漢字音の概説書に書かれている、下のごとき内容を指す語として用いる。

呉音―中国南北朝時代(四二〇~五八九年)、日本が緊密に交渉していた百済は、中国南朝諸国と国交を結ぶ。その南朝の中国語音が、直接あるいは百済経由で日本に伝えられたのが、「呉音」であると考えられている。仏典漢語の音読に、多く使用された。

漢音―中国唐代(六一八~九〇七年)中期の長安音を母胎とする。七世紀後半から八世紀にかけて、中国から直接伝えられたと考えられている。漢籍漢語の音読に、多く使用された。

唐音―宋代(九六〇~一二七九年)以後の中国音を、臨済宗・曹洞宗・黄檗宗の僧や訳官(通訳)によって伝えられた音である。日常語音としてはほとんど使用されない。

常用漢字表において呉音[1)]は、数の上で、下のような位置を占める(『三省堂五十音引き漢和辞典』〈2004年、三省堂〉の音認定に依る)。

---

* 広島大学 教授

1) 詳しくは、佐々木 勇「日本漢音研究の現在」(「日本語学」2011年 3月号、明治書院)を御覧願いたい。

	第一音	第二音	第三音	第四音	第五	音計
同音	930	18	2	0	0	950
漢音	693	58	1	0	0	752
呉音	**377**	**157**	**4**	**0**	**0**	**538**
慣用音	55	32	1	0	0	198
唐音	4	8	1	1	0	14
計	2059	273	18	1	1	2352

上のとおり、2532例の音のうち、最も多いのは、漢音と呉音とが同音のものである。それに、漢音752例が続く。

呉音は、漢音より200余り少ないものの、漢音との間に圧倒的な差は無い。

また、この「常用漢字表」の音訓は、「特別なものか，又は用法のごく狭いもの」を「1字下げ」で示している(「常用漢字表」の「表の見方及び使い方」、参照)。

この1字下げされた音141例に限って、上の音種を区別すると、下のようになる。

漢音呉音同音	9	慣用音	29
漢音	22	唐音	7
呉音	**74**		

すなわち、「特別なものか，又は用法のごく狭い」音の、過半は呉音である。具体的には、「帰依」のエ・「香華，散華」のゲ・「夏至」のゲ・「象牙」のゲなどである。

上の呉音読語は、伝来が早い語や仏教に関する語であり、現代日本語において、呉音が頻用されない漢字が存することは確認できる。

しかしながら、「央(オウ)・応(オウ)・横(オウ)・音(オン)」など、呉音にも、「常用漢字表」の最初の音(第一音)に掲げられているものが有る。それらの呉音は、現代において未だ生産力を持つ。2010年の「常用漢字表」に追加された漢字・音に、「臆(オク)・蓋(ガイ)・隙(ゲキ)・捉(ソク)・麺(メン)」など、32 の呉音が含まれているのも、呉音が衰退する一方ではないことを示している。

また、新「常用漢字表」において、「音(イン)」の語例が、旧「常用漢字表」の「音信不通(いんしんふつう)」から、「母音(ぼいん)」に変更されのは、呉音「オン」の勢力が増大し、漢音「イン」の語例が限られてきたことの反映である。

よって、呉音は伝来の古い語に残存するに過ぎないという一般認識があるならば、改められる必要がある[2)]。

---

2) ただし、日本語史上、呉音から漢音へ変化する大きな流れは存する。そして、その実態を捉えた研究が、公表されている。来田隆『抄物による室町時代語の研究』(2001 年、清文堂出版) 第三部付録、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(1982　年、武蔵野書院)付論第三章、飛田良文『東京語成立史の研究』(1992年、東京堂出版)等、参照。これらの研究では、一字一音・一漢語一音となる変化が進行すること、その固定する一音は漢音である場合が多いことが、言われている。なお、松井利彦『近代漢語辞書の成立と展開』(1990 年、笠間書院)第五章には、明治初期において、漢音と呉音とは、漢文訓読文―漢音、通俗文―呉音と、「位相を異にする音」であったことが指摘されている。同「明治期漢語辞書の諸相」(『明治期漢語辞書大系別巻三』〈1997 年、大空社〉)、同「明治中期の漢音と呉音」(大野晋先生古稀記念論文集

3. 日本漢字音学習と反切・同音字注—新訳『華厳経』を例に—

そこで、以下、現代においても漢音に劣らず重要である呉音が、いかに学習されてきたのかを見る。その学習法を知ることは、現代の日本語教育における漢字音の教育法を確認することに繋がる。

本稿では、『妙法蓮華経』『大般若経』と並び重要な呉音資料である、新訳『大方広仏華厳経』を対象とする。

3.1 新訳『華厳経』の訓点本

新訳『華厳経』の訓点本として、新訳『華厳経』正安4年(1302)高山寺の朝玄加点本が、下に公開されている。この高山寺旧蔵本は、現在、国立国会図書館の所蔵である。

http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541655

加点は粗であり、「震(平)吼(平)」「覲(平)仰(平濁)」「優(上)鉢(入)羅(上)」「奮(平)迅(平)」など、語の単位で加点されている。

音だけで通読された本資料のような「字音直読資料」であっても、文章中の「語」を意識して音読されたことが、日本に大量に伝存する新訳『華厳経』古写本の訓点から知られる。

3.2 新訳『華厳経』の音義

唐・慧苑撰『新訳華厳経音義』は、宋版・高麗版などの版本や写本として、現存する。この音義の掲出字も、単字ではなく語単位で掲げられ、当該語における漢字の音・義を注している。

日本において作成された高山寺蔵喜海撰『新訳華厳経音義』1228年写1229年加点本も、同様である。語(熟字)を掲出して、注を付すことを基本とする。

3.3 新訳『華厳経』読誦音における漢音形

華厳経は、呉音読中心で音読された。しかし、喜海撰『新訳華厳経音義』には、漢音も加点されている。

僅(平)<渠鎮反>其(上濁)　覲<渠恪反>謁(入)<於歇反>　鈴(上)<上音靈>鐸(入)<徒各反>

化(平)誘(上)<與久反>　誘(上)<與久反>誨(平)<荒内反>　巾(平)馭(平濁)<魚據反>

映(上)<於敬反>蔽(平)<必祭反>　など、上の傍線例が漢音形である。

これらの諸字は、なぜ漢音読されるのであろうか。

沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(1997年、汲古書院)は、高山寺蔵『新訳華厳経音義』・同『貞元華厳経音義』から漢音形を含む語を六五例抜き出し、反切に依る漢音形の混入が有った

刊行会編『日本研究言語と伝承角川書店』、1989 年12 月)、同「文体要素としての漢字音」(「国語と国文学」2002年 11月号)等も、参照。

ことを指摘した[3]。漢音形を含む語例に続く文章を、次に引用する。

> 右の中には、全例漢音形である「映（エイ）（呉音「ヤウ」）」の様なものが有り、こういうものについては、反切がその要因とは考えられない事は勿論であるが、たとえば「僅（キン）呉鎮反」「覲（キン）呉恪反」（共に呉音は「ゴン」）の如き例は、反切下字「鎮」「恪」は漢音でも呉音でも「㋕ン」形となるから、その反切音の結果が漢音形となって現れたものではないかと考えられるのである。この二字の様な場合には「（伝承）呉音」の形は反切からは導き出せないのである。右に取り上げた漢音形のその出現の理由について一々を正しく判定する事は勿論不可能であるが、その一要因として反音を案じた事が有るはずである。高山寺蔵華厳経字音点諸本及び華厳経音義二本に見られる片仮名音注及び声点は、共に伝承呉音のみを反映しているものではなく、反切(及び同音字注)に依る人為音が介入していると考えねばならない。従って、これ等を呉音体系の復元の為に利用するにあたっては、その人為音を排除する作業が要求されるであろう。（沼本著書、一一五頁。下線、佐々木。）

その後、喜海撰『新訳華厳経音義』の奥書に「両三本之音義抄寫」とある、この「両三本之音義」は、宋版華厳経の「音義」(高山寺旧蔵小双紙本巻末釋音・同宋版一切経福州本釋音)であることが明らかにされた。[4]

上のとおりであれば、これは大きな問題である。

なぜならば、日本呉音加点例の背景に、中国で作成された反切の影響の有無を常に考慮する必要が生じるからである。

現在のところ、喜海『新訳華厳経音義』の1229年加点訓点を参照して、後の加点本が生まれた、と考えられている。[5]よって、沼本が推定したとおりであれば、喜海『新訳華厳経音義』の反切によって、新訳『華厳経』の読誦音が変更されたことになる。

そこで、以下、次の点を調べることとする。

Ⅲ-4喜海撰『新訳華厳経音義』反切・同音字注と仮名音注とを比較し、両者の異同を見る。

Ⅲ-5　両者一致するものについて、喜海撰『新訳華厳経音義』反切・同音字注の影響で新訳『華厳経』読誦音が変更されたものか否かを見る。

---

3) 沼本克明「高山寺蔵字音資料について」(『高山寺典籍文書の研究』〈1980年、東京大学出版会〉)。いま、沼本『日本漢字音の歴史的研究』(1997年、汲古書院)四九八頁から引用する。

4) 池田証寿「宮内庁書陵部蔵高山寺旧蔵本宋版華厳経調査報告(一)」(『平成十六年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団、2005年3月、pp.81-95)、同「高山寺蔵新訳華厳経音義と宮内庁書陵部蔵宋版華厳経」(石塚晴通教授退職記念会編『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院、2005年5月、pp.143-159)、同「高山寺藏新譯華嚴經音義について」(『漢文読法と東アジアの文字』ソウル太学社、2005年12月)、同「高山寺藏新譯華嚴經音義和宮内聽書陵部藏宋版華嚴經」(『日本學・敦煌學—石塚晴通教授退職紀念論文集』上海辞書出版社、2005年12月、pp.268-281)、同「宮内庁書陵部蔵高山寺旧蔵本宋版華厳経調査報告(二)」(『平成十七年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団、2006年3月、pp.241-250)、同「高山寺新訳華厳経音義と宋版大蔵経」(『平成二十五年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団、2014年3月)。

5) 注 3) 沼本論文、榎木久薫「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経をめぐって」(「鎌倉時代語研究」19, 1996年 8月)。

3.4 喜海撰『新訳華厳経音義』反切·同音字注と仮名音注との比較

3.4.1 反切·同音字注と加点音注との一致例

上に引用した沼本論文で、漢音形とされて掲げられた『新訳華厳経音義』四十三語のうち、反切を有する字は、反切·同音字注と仮名音注とがすべて一致する。再度、一部を引用する。

僅(キン)(平)<渠鎮反>其(コ)(上濁)　覲(キン)<渠恪反>謁(エツ)(入)<於歇反>　鈴(レイ)(上)<上音靈>鐸(チヤク)(入)<徒各反>

化(クワ)(平)誘(イウ)(上)<與久反>　誘(イウ)(上)<與久反>誨(クエ)(平)<荒内反>　巾(キン)(平)馭(キヨ)(平濁)<魚據反>

映(エイ)(去)<於敬反>蔽(ヘイ)(平)<必祭反>など。

しかし、『新訳華厳経音義』全加点例中に、日本漢字音として一般的ではなく、反切·同音字注から作り出されたと考えられる「人為音」(不〈方久反〉ヒウ·寶〈博抱反〉ハウの類)は、存在しない。

3.4.2 反切·同音字注と加点音注との不一致例

喜海撰『新訳華厳経音義』には、反切·同音字注と仮名音注とが一致する上のような例よりも、両者が一致しない例の方が多い。以下に、具体例を挙げる。

○禮(レイ)(平)覲(コン)(平濁)〈渠恪反〉(87.1)[6]　瞻(セム)(平)覲(コン)(平濁)〈渠鎮反〉(70.4)

始めに引用したとおり、沼本(1997)は、「覲キン」は「渠恪反」による「反切音」だとした。しかし、「渠恪反」「渠鎮反」の反切を引用しながらも、上のとおり、呉音ゴンを加点する例が存する。

○鈴(レイ)(上)〈上音靈〉鐸(チヤク)(入)〈徒各反〉(16.3)　鈴(レイ)(上)〈上音靈〉鐸(チヤク)(入)〈徒各反〉(55.6·106.5)

鐸(チヤク)の反切「徒各反」は、呉音で読めばダク、漢音ではタク。

○「垣(クワン)(平)」(19.3·55.7·83.4)の于元反あるいは羽元反は、「クワン」に一致しない。

○媒(ム)(平)〈莫來反〉定(58.2)

反切から、呉音「ム」は、導かれない。

○軒(カン)(去)檻〈虚言反〉(83.2)　軒(カン)(去)檻〈許言反〉(44.4·55.4·92.4)

どちらの反切からも、呉音「カン」は、導かれない。

○劇(キヤク)(入)〈渠力反〉苦(34.2)

反切から、呉音「キヤク」は、導けない。

○樹岐(キ)(上)〈敕(チヨク[左](朱)勅字也)羈反〉(16.5)

---

6) 以下、喜海『新訳華厳経音義』の用例所在を、高山寺資料叢書複製本の頁数と行数とで示す。(87.1)は、八七頁1行目の意である。

反切上字に「チヨク[左](朱)勅字也」の加点がある。加点の通りに読んだのでは、帰字「キ」にはならない。

○酸(シユン)(去)〈蘇官反〉楚(21.5)　酸(シユン)(去)〈蘇官反〉酬(46.7)　酸(シユン)(去)〈蘇官反〉劇(49.6)

反切から、呉音シユンは、導けない。

○完(クワン)(去濁)粒〈戸官反〉(51.3)

反切上字「戸」は、漢音呉音ともコであったと考えられ、反切から呉音「グワン」は導かれない。

○問訊(シン)(平濁)〈下音信〉(35.4･68.6･77.3)

同音注から、呉音形「ジン」は導けない。

○信軸(チク)(入濁)〈下音逐〉(85.5)

同音注から、呉音形ヂクは導けない。

○奮迅(シン)(平濁)〈私閏反〉(17.2･64.7･85.1)

反切から、呉音形ジンは導けない。

○危(クヰ)(平)〈語韋反〉脆(40.5)

反切上字「語」は、漢音呉音とも濁音であったと考えられ、反切から日本漢字音「クヰ」は導かれない。

上に若干例を掲げたごとく、反切に一致しない例が比較的多く存する。その大部分は、喜海撰『新訳華厳経音義』が引用する宋版反切が、加点された呉音中心の伝承読誦音と合わない例である。

3.5 新訳『華厳経』の漢音形は、喜海撰『新訳華厳経音義』反切･同音字注によって生じたのか？

ここでは、喜海撰『新訳華厳経音義』成立以前の新訳『華厳経』読誦音における漢音形の出現について見る。

3.5.1 新訳『華厳経』平安初期点

石山寺本新訳『華厳経』平安初期点中の二十四例の字音点[7]のうち、「税〈西反〉」(巻第二八)･「翊〈由ク反〉」(巻第七五)･「袤〈ホウ反〉」(巻第三三)は、漢音形を注していると見られる。

上の漢音形三例のうち「税」「翊」は、高山寺蔵『新訳華厳経音義』･同新訳『華厳経』寛喜点[8]でも、

---

7) 大坪併治『石山寺本大方広仏華厳経古点の国語学的研究』(1992年、風間書院)二二頁。原本も閲覧することができた。石山寺御当局および石山寺文化財綜合調査団の皆様に御礼申しあげます。

8) 高山寺蔵新訳『華厳経』寛喜点の例は、原本調査ならびに榎木久薫「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経

輸税(平)〈尸鋭反〉(『音義』52.7)　輸(上)税(上)(寛喜点巻二十八B47)

翊(入)〈餘力反〉從(『音義』105.1)　翊(入)從(去濁)(寛喜点巻七十五212)

と、漢音の加点である。[9]

3.5.2 新訳『華厳経』平安中期点

○新訳『華厳経』巻第三十五(聖語蔵本神護景雲二年御願経(四一一〇一一〇五一四九))平安中期頃点[10]

激ケキ　湍タン　詖ヒ　蚊モン　蚋ネイ

激ケキは、漢音形である。

3.5.3 新訳『華厳経』院政期点

○聖語蔵本院政期点

通番2160 乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十五(漢音形を中心に挙例する。以下、同じ。)

僅(平)其(第一三紙16行目)　毀(平)禁(平)(三1)　暎(去)蔽(平)(一8)　鈴(上)澤(入)(四17)　靈(平)香(六31)　陂(平)澤(入)(一二10)　鬪(平)戦(平)(一二29)　鬪(平)時(一四9)　霜(平)雪(入)(一五20)　澤(入)香(一六13)　悦澤(入)(一六30)　婦(上)人(一二21)　須(上)臾(上)(一二26)

通番2168 乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十七

覲(平)謁(入)(一六19)　仰(上濁)世界(四25)　仰(上濁)住(一三4)　鑽(去)仰(上濁)(一八1)　狂(平)亂(一五5)

○東大寺図書館蔵院政期点(貴重書101部76号)

覲(平)仰(平濁)(巻第80)—(瞻(平)覲(平濁)(巻第55)　奉(平濁)覲(平濁)(巻第61・80)　往覲(平濁)(巻第70)　礼覲(平濁)(巻第75)　當覲(平濁)(巻第77))

誘(上)誨(平)(巻第67)　霊(平)瑞(平濁)(巻第72)　鈴(上)澤(入)(巻第76)　投(平)彼(巻第51)

加点字翻刻並びに分韻表」(「鎌倉時代語研究」21、1998-05)に依る。

9) 一方、「袤」は、延袤モウ(平)〈莫句反〉(『音義』41.5)延(平)エン袤(平)モウ(寛喜点巻二十二80・81巻七十五214)・延(薄墨朱平)エン袤△(薄墨朱平)モウ(巻三十三寛喜点17)と、呉音の加点である。平安初期では漢音形であったものが、鎌倉時代には呉音形になっている。

10) 築島裕「正倉院聖語蔵経巻調査報告(一)—奈良時代書写の華厳経について—Ⅲ付論ⅰ」(「南都佛教」第八十六号、2005年十二月、『築島裕著作集第二巻』〈2015年、汲古書院〉所収)に依る。

3.5.4 新訳『華厳経』鎌倉期点

○高山寺蔵本承元三年(一二〇九)霊典加点

『大方広仏華厳経』巻第六十一・巻第六十三・巻第六十七・巻第七十五・巻第七十九(第一四函24・25・26・27・28)

巖(平濁)巘(平濁)(巻第67)　洪満(巻第75)　牽(去)馭(上濁)(同上)　縣(去)布(同上)　顔(去濁)髪(入)(同上)　喜顔(去濁)(同上)　諷(去)詠(平)(同上)　嚴麗(平)(同上)　開剖(平)(同上)　婦(上)人(同上)　映(去)蔽(平)(巻第79)　縈(平)映(去)(同上)　蓊(平)鬱(入)(同上)　洞(平)窟(入)(同上)　投(平)於彼(同上)　(礼覲(平濁)(巻第75))

○聖語蔵本鎌倉初期点

通番2112 乙種写経『大方広仏華厳経』巻第一(貞永二年〈1233〉浄弁校合奥書)

嚴麗(平)(二30)　階(去)砌(平)戸(上)牖(平)(三9)　祐(上)物(七6)

通番2150 乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十三(貞永二年〈1233〉校合奥書)

毀(平)禁(平)(十四10)　誘(平)進(十五14)　群蒙(平)(十12)　機(上)関(平)(十一18)　龍(平)奏(平)(十三26)

通番2152 乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十四(貞永二年〈1233〉校合奥書)

蔭(平)映(去)(四13)　陂(平)澤(入)(四17)　化誘(上)(十23)　琴(平)瑟(入)(十二27)　顔(去濁)容(上)(十六17)　雅(上濁)思渕(平)才(平)(十七13)

通番2192 乙種写経『大方広仏華厳経』巻第二十八

覲(平)仰(平濁)(五4)　勧誘(去)(一15)　教誘(去)(五23)　寛(平)宥(去)(三25)　才(平)能(平)(三6・八15・一八1)　嚴麗(平)(七22)　臨(去)馭(上濁)(一八2)　若仰(上濁)(一四24)　顔(去濁)貌(上)(八15)

○金剛寺蔵本鎌倉初期点

涕泗咨嗟(三十七)　利犁(七十八)

○聖語蔵本鎌倉中期点

通番1826 甲種写経『大方広仏華厳経』巻第四十八

慈顔(上濁)(八26)　投(平)火(二十三7)

以上の通り、喜海撰『新訳華厳経音義』成立以前の新訳『華厳経』読誦音に、漢音形はすでに存在していた。

3.6 新訳『華厳経』の音読になぜ漢音形が入ったのか

華厳経音読において、「僅·覲」の漢音形キンは、「僅(キン)(平)其(コ)(上濁)」「覲(キン)(平)謁(エツ)(入軽)」「覲(キン)(平)仰(カウ)(平濁)」の語に限り、見られる。それ以外の「禮覲」「瞻覲」などの語では、呉音「ゴン」が加点されている。

喜海撰『新訳華厳経音義』も、それまでのこの読誦の実態を反映し、禮(ライ)(平)覲(コン)(平濁)〈渠恪反〉(87.1)·瞻(セム)(平)覲(コン)(平濁)〈渠鎮反〉(70.4)と、日本漢字音では「キン」が導かれる反切を付しながらも、ゴンの呉音形を加点している。

他漢字の漢音形も、語によって、出現が偏っている。

よって、華厳経読誦の中心である呉音とは別体系の漢音を、「単語音」として学習し、取り込んだものと考えられる。[11]この学習の仕方は、平安時代においてすでに行なわれており、以後引き継がれた。

3.7 類例

呉音読中心の親鸞(1173-1263)加点『西方指南抄』には、全体の1.4%の漢音形が存する。

これらの漢音形は、当時一般に漢音読された固有名詞、あるいは、一般名詞の構成要素である。それらの漢字に、親鸞も漢音を加点した(佐々木勇「親鸞自筆『西方指南抄』における漢音について」(「国文学攷」第219号、2013年 9月))。

4. 結び

以上、「日本漢字音の学習史と漢字音教育」の題目の下、述べたのは、以下の事柄である。

1. 日本漢字音は、他の東アジアに残る漢字音と比較して、多様である。
2. 現代日本の常用漢字表においても、漢音同様、呉音は重要である。
3. 呉音読中心の新訳華厳経においても、漢音で読むことが適切である「語」は漢音読された。
4. 上の学習·教育法は、平安時代から、引き続き行なわれている。
5. 漢字音は、「漢語」の音として、文脈着きで教えることが大切である。そうでなければ、学習者は、漢字音を正しく使用できるようにはならない。

---

11) このことは、榎木久薫「字音直読資料としての高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経 : 漢音系字音の混入について」(「鎌倉時代語研究」23, 2000年10月)において、すでに指摘されている。ただし、この論文では、新訳華厳経の字音直読が寛喜元年(1229年)の加点本から始まるとして、その時点での問題に特定している。本発表は、平安初期の訓読時点からすでにそのようであったこと、並びに、漢音形が宋版反切の影響によって生じたのではないことを、指摘したものである。